

社会科の授業を対人援助学の視点から⑨

2025 年 5 月 内田一樹

1. はじめに

3 年目となる、2024 年度の「東北と復興」（高校 1 年生から高校 3 年生が対象、定員 20 名、火曜日午後 5・6 限、2 単位）が終わった。高校 1 年生の時から高校 3 年生まで連続して受講した生徒が卒業する年度末であった。2024 年度は、7 月に宮城県石巻市へ、12 月に福島県浜通りへと初めて年に 2 回のスタディツアーを実施した。同じ「東北」と呼ばれる地域であってもそれぞれ「復興」の今の状況は異なっている。そこで 2 か所のスタディツアーを実施した 2024 年度の学びは子どもたちにとってどのようなものであったのか、どのように受け止めているのかについて考えていく。

この授業では年間の学びの中で節目ごとに生徒たちに文章を書いてもらっており、それを年度末に 1 年間の学びについて文集にまとめている。2024 年度は節目ごとに 4 つの文章課題を課している。その時期と内容は以下の通りである。

時期	文章課題の内容
4 月～5 月の年度初め	なぜ「東北と復興」を受講したのか？今「東北」と「復興」ときいて思い浮かべるイメージとは？の 2 点をテーマに文章を書いてください。
7 月末から 8 月 (宮城県石巻市スタディツアー後)	宮城県石巻市スタディツアーを通して感じたこと、思ったことについて自由に書いてください。
12 月から 1 月 (福島県浜通りスタディツアー後)	福島県浜通りスタディツアーについての感想を書いてください。その際に以下の点について留意してください。 事前学習で水俣病についてオンライン講演も含めて学んできました。事前学習で学んだ水俣病やほかの社会の中で起こっていることと福島第一原発事故で起こったこととの間のつながりについてツアーを通して考えたこと、感じたことを書いてください。
1 月から 2 月	「東北と復興」の 1 年間の学び、石巻市スタディツアーや水俣病学習、福島県浜通りスタディツアーを通して「東北」と「復興」について今、あなたが考えていること、思っていることを綴ってください。

年度末に書いてもらった文集の課題の文章にある生徒たちの言葉から（一部抜粋）、2 か所のスタディツアーを実施した 2024 年度の学びは子どもたちにとってどのようなものであったのか、どのように受け止めているのかについて考えていく。

2. 2024 年度の「東北と復興」文集の年度末課題における子どもたちの言葉（一部抜粋）

A：1 年間の授業を通し、これまで施設名などで度々見てきたものの、伝えることについて深く考えて来なかった「伝承」という言葉。学んでいき、考える中で、「東北」にも「復興」にも密接に関わっていて、今後の復興にも最も大切な物だということを知り、この言葉の重みを感じることが出来ました。

3. 11 で数多くの人や物が失われ、文化、風習が、伝統が絶える危機にあり、復興においても伝える事が足りずトラブルが発生したりしている中、将来同じ轍を踏むことがないように、これまで以上に伝承の必要性を見直す必要があるのではないだろうか強く感じます。近年ではインターネットなどが発達して昔よりもはるか

に「出来事を伝える」ことが簡単になりましたが、震災による過酷な経験を経た地域住民が、その記憶を後世に伝えることが難しい人も数多く存在するのも事実です。伝えられない人と伝える必要性という対極な存在をどちらも無下にせず、その記憶をどのようにして守り、伝えていくか。そして、経験者では無い、経験者にはなれない我々は、どのように東日本大震災の伝承に関わっていくかを考えるのが、今を生きる日本人にとっての課題なのではないかと1年間の授業を通して考えました。

B：一年間の学びを通して、自分の「東北」と「復興」に対しての考えの変化や、現地で感じ取ったイメージや想いは沢山ある。特に「復興」というとても大きなモノに関しては、あるべき形や、いわゆる正解などを探し求め続けた。けれど正解がないというのもわかっている。なぜなら、「復興」というのは断片的ではなく断続的で、一面的ではなく非常に多面的で、一時的ではなく不断的なものだからである。そう、一年間行ってきた自分たちの取り組みは、答えのない永遠の道（プロセス）を進み続ける行為だった。一年間、この行為を続けるのは自分にとって、とても意義を持ったモノになった。その分、疑問も増え続けたが。そんな多くの疑問を抱える中、「東北」と「復興」に対しての自分の考えを述べる。

…（中略）…

ここまで「東北」と「復興」に対しての考えを述べる中で、ずっと悩むのが自分の立ち位置である。つまりは自分のポジショナリティ。もちろん被災当事者ではないので自分事には中々なれないが、決して他人事ではない。自分には厳然と加害性があるわけで、いわば加害当事者という当事者の一種なのかもしれない。加害責任があるから決して他人事ではないのだ。自分の「東北の復興」をまとめると、それは加害当事者の「ごまかし」（理解した気になってしまっている、惨事便乗型資本主義）と被害当事者の「あきらめ」（帰りがたかったふるさとなさがない、震災トラウマ復興ストレス、分断・対立）。

じゃあ自分はどこにいればいい。宮地尚子の「環状島＝トラウマの地政学」に出てくる環状島の論理を自分に当てはめて立ち位置を考えてみた。非当事者の自分たちは、支援者と傍観者の二択に分かれているらしい。どちらも腑に落ちない。支援者と思える行動や考えをしているわけでもないし、傍観者と思えるほど無知・無関心ではない。自分の立ち位置を模索している中、腑に落ちる表現があった。それは立命館大学の村本教授の「証人」という言葉だ。環状島のどこにいるのかはまだ分からないが、今は証人という言葉に納得している。これで悩んでいた、自分の行動や考えも少し明確になった。証人になるということ、それは被災当事者の証言や背景を理解していくプロセスであり、代弁（もちろん理解はしきれない前提）するという事であると考え

る。

「東北」と「復興」は最初に記した通り、答えのない永遠の道を進み続ける取り組みだと思う。学んでいくうえであまりにも多い領域に正解がない中悩み続けるのは簡単なことではなく、モヤモヤが増える一方である。だが出てくる疑問の分、学び得るものも多く、一年間を通してとても意味のある取り組みだったと思う。水俣病問題や沖縄米軍基地問題に繋がることもある。社会という大きな領域の中で繋がっていく感覚を覚えた。ここでは主に「復興」の考えを述べたが、ほかにも様々なことを悩み考え学んだ一年間。最後に受け取ったモノを紡ぎ考え、既存の社会に反映していくことが大事だと思った。

C：スタディーツアーに出かけて、実際に東北という地を踏んでみて、同じ地球に、ちゃんとあるんだな、と、実感が持てました。それと、震災を受けての直後ではないからかもしれないけれど、人々の営みは、いまでもそこにあるんだなって。どんな悲惨なことがあっても、徐々に徐々に、これから続いていく日々に戻っていくっていう力を感じられて、すごいな、と思うと同時に、これからはもっともっとエネルギーを使用して、地球温暖化が進んで、そんなことを繰り返してきた地球ですら離れるようなことになってしまうのはやめて欲しいし、阻止したいなと思いました。それから、1000年前の民話に、災害についての記録があったということを知って、伝承、というものについて、興味を持てたので、様々な場所の様々な伝承について調べて見たいと

思いました。後、ちょっと違うけど、過去に起きた災害に因んで名付けられた地名についても調べてみたいなと思いました。あとは、同じ東北でも、福島と宮城では、被災の仕方が全然違って、その中の人々にフォーカスしても、また違った被災状況になっていて、それが、人々が被災について語りにくくなっている原因になっているんだなと痛感しました。

それから…全然違うことになってしまうかもしれないのですが…。石巻で食べた牛タンの美味しさが忘れられないです。この震災で学んだ対策方法を存分に行って、もっとそういった、自然との共存、共に地球で生きるということを、人間がみんな考えていて、そういった観光、産業の需要が今までの比にならないくらいに上がったらな、と思いました。こういった、原発等に頼る社会じゃなくて、美味しいものを食べて、庭の草刈りして、あったかい布団で寝る、見たいな、そんな豊かさを社会全体で目指す方向にシフトチェンジしないかな、という妄想をしてしまいます。東北は、もともとそういったイメージが、私の中で強かったので…。「妄想」ですが…。牛だって、食用としては地球に優しくないのですよね。

「復興」については、これについても本当に人一人一人によって、その人の復興っていうものがあって、それぞれ違うものだから、そりゃあ、完結することもないよなと、考えました。このことについては、宮城でよりも福島での方が、私の中では沢山考えられたように思っていて、私は今まで、復興というのは何千年後には必ず成立するものなのではないかと思っていて、それは、当事者たちがいなくなった後、その当時の地形との大幅に変わった世界で、生きる人々は、私たちの年代で起こった震災とは、直接的な関わりが大きく薄れ、新しい文明社会が築かれると考えていたからです。ですが、福島は原発事故という人災が起こったが故に、これから10万年ぐらい管理しなければならない危険なものが置かれ、それによって復興という未来が想像しにくくなったからなのかな、と思いました。それから私は、環状島について学んだ時に、前述した今までの考え方でいうと、当事者も支援者も傍観者も全ての人が海に飲み込まれ、底に沈んで地球に還った後、また新たな文明が生まれ、またそこに住む人々の日常が生まれることが復興なのかなと思っていたけれど、相馬高校の方々の例え原発問題が解決しても、これからずっと、この災害のことを伝承していかなければいけないというお話を聞いて、海の水位をなるべく引いた状態にする努力を、ずっと続けていくことこそが、復興への、というか…。伝承への足掛かりになるのか、今まで持っていた考えは、単なる「忘却」だったのかなと考えられました。

このようなことを考えてきて、復興に終わりはないのかもしれないな、と考えました。でも、何度も話させていただいてありますが、ゆめの森学園のように、これからの未来に繋げていく行動、活動という、一步一步は踏み出せるのだなと学べました。

D：復興とはどうあるべきなのか。この問いはこの講座を取らなければ考える機会がなかったかもしれない。しかし復興を考える過程で生まれた産物は私にとってかけがえのない学びになった。復興というのは物理的な再建だけでなく人間性の再建であり見つめ直しであるのではないだろうか。そしてそれは非当事者である私にも大きな意味を持っている。災害という大きな破壊を経て揺らいだもの、揺らがなかったもの、生き方や価値観。それを知り考えるということの意味。石巻の閑散とした風景を眺めた時、震災前の情景をイメージし感傷的になるが、それは3.11が自分と切り離せる存在ではなかったからだろうか。例えば200年後の人間が石巻に対して同じように感傷的になるのだろうか。人間の歴史を俯瞰した時私が今いるこの場所も何らかの復興を経て成り立っていてこの土地に思いを馳せた人がいたのだろうが、その人は今この土地を見て復興を果たしたと思えるのだろうか。この講座を取る前のニュースで阪神淡路大震災は復興完了という記事を見て当時の私も国からのその言葉通り復興は終わったんだと受け取ってしまったが、今考えるとそれはインフラや都市などの可視化できる復旧を指していて失われてしまったコミュニティや暮らしが元通りになったわけではないのだろう。復興というのは極めて多面的であり一つの視点で捉えられるものではない、文化や精神的なものも絡み合いどこかで対立してしまうことも免れない。そう考えた時、復興というものに終わらないあるいは復興が終わ

ったと誰が決められない。復興の基準は人によって異なり満場一致での復興を実現するのはほぼ不可能に近いのかもしれない。

私は復興に対してもちろん人の希望になることだと思うが同時に残酷な側面も存在していると感じるようになった。福島は誰かの犠牲の上で復興が成り立っていると強く感じ、表面上では行政にとっての復興を意味する事業が進められていてそういった事業は無関係な人からしても明らかな復興であるが、上書きされてしまった人達が自分たちの存在を認知させることはとても難しい事を理解した。これは加害構造が明確化されているが被災者の間でも復興観の対立は避けられない。可視化されなかった思いを抱えている人が私の認知が届かない範囲にも大勢いると考えると「語り」が記録以上の意味を持つ事が分かる。復興とは「過去の出来事の克服」という目的だけでなく、「どのように記憶を継承し、未来へとつなげるのか」という問いでもあるのではないか。震災を経験した人々の思いが時間とともに風化しないようにすることも、復興の一環と言えるのだろうし、自分における復興の解にはまだ自信がないが語りの重要性というこの講座で得られた学びを生かしたい。

しかし現在行われている復興を知った時国と地域の関係性が歪であり物凄く距離を感じた。私自身地域と呼ばれる場所で育ってきたわけではないし自分の地元に対して帰属意識が持てないので意識した事がなかったが生まれ育った場所というのは根本の価値観や人間性に凄く影響を与えるんだなと知れた。それを踏まえると理想とされている復興と一概に言っても地域によって理想への認識の差が生じるのは当然であると言える。そのために必要なのはやはり被災者達が主体であるべきだし外部支援者は郷に入れば郷に従えのようなその地域への理解を示す姿勢が大切だと思う。しかし現状を見るとイノベーションなどの新たな価値観が被災地に持ち込まれて国家の利益を優先したかのような事業が進められている。マクロな視点でしか物事を判断していないのかと感じてしまうが、実際私が石巻や福島に行っていなかったらそういった創造的といわれる復興に問題意識が持てなかった可能性は十分あり得るのが恐ろしい。その土地への愛着を想像するのに資料や証言では難しく実際に赴くなどの経験がとても重要であるしパターンリズミ的な思考から脱却して同じ視点に立ちながら対話できる関係性にならないければ少しでも理解をすることは難しいと思う。私自身福島と石巻の一回の経験で何かを理解した気にならないように心掛けているし情緒的、身体的痛み共感には限界値が存在しているので完全に理解するのは不可能かもしれないが、被災者と非被災者間のギャップを埋めるために私に求められる事とは寄りそう姿勢であると身をもって感じている。この関係性はとても繊細であって一度上下関係が構築されてしまうとそこから抜け出す事は容易ではないと想像できる。非当事者が震災や復興について考える事は社会で見ても個人で見ても大きな意義をなす事だが被災者の主体性が損なわれる事はあってはならない。

正直まだ様々な事に霧がかかっていて脳への負担を感じ続けた一年だったけど語りの重要性、トラウマへの向き合い方、安全神話からの脱却、防災意識の形成などなど人生の指標にもなりうる大きな学びが得れたのでこの講座をとってよかったと思う。

E: 正直よく分からない。分かったなんて言えないのは、もちろんのことだが、東北の方達に僕が何かをするべきなのか。その一つが、知ることだと思うが、僕が知ったとて、去った人が戻る訳でもない。

僕が考えているのは、「みんなで考える」ということだ。復興とはどうあるべきか、も大事だけど、それにはまずこの「みんなで考える」が必要だと思う。双葉屋旅館の女将も、大熊未来塾の木村さんも、似たことを仰ってくれた。でもそれは、とても難しいことだ。何故なら、考えるには知らないといけないし、知るには、行動しないと行けない。俺ら、「東北と復興」を受講した人は、確かに自分で選んだものの、結局は内田がこの授業をやってくれてなければ、行けなかったと思う。中には、受講してなくても、自分から行く人も、いないとは言えない。でも、そんな人、この受講者の中の、一人や二人だと思う。俺は、胸を張って「行けた」と言えない。そして、受け身の「知る」という行為には、本質というか、本音は見出せないと思う。(この受け身の「知る」とは、自分ごととして考えていないや、この出来事がそこだけの時間軸で完結していると思っている人のことだ。) 自分から「知る」意欲があることを示して、それでやっとスタートラインに立てると思う。そう

やって、自分から行動しなければ、見たもの聞いたことが、その情報としてその状態で止まってしまい、深めることもできない。それに、スタートラインに立ったからといって、被災者の本音というゴールが自分の前にあるとも限らないと思う。そんな自分の身を、心を削りながらのことが「みんな」で、出来るだろうか。「知る」ことですら難しいのに、「考える」まで、「みんな」は、及ぶのか。インターネットが普及して、AIまで発展して、授業はタブレット一つで行えて、どんどん人と関わらずに、生きることが出来て、（それを生きるとは思えないが）手をつけられなくなる。どうすればいいのだろう。そもそも、考える必要がないと思っている人とか、それすらも無い人を、原発というものに、何かのかけらでも、自分に責任があると思えない人は、見捨てるしか無いのか。しかしそれは根本の解決には、至っていない。それに僕は、それを諦めちゃいけないと思う。「皆で考える」必要があることを知ったのだから、そこにも僕らが、追求しなきゃいけない責任があると思う。

F：まず結論から入るが、「復興」というのは人によって変わり、正しい「復興」の形は存在しない。というのが私の考えだ。このような考えになるまでにいろいろなことがあったものの、今現時点での私の結論はこれである。このような考えになるまでの経緯をいくつか挙げていこうと思う。

この講座を選択し、最初の方の授業にて今年のこの講座の人たちが製作した壁新聞を見る機会があった。この壁新聞は学発に展示された後に仙台メディアテークにて展示されたものである。壁新聞の中に、「あなたにとっての復興とは？」という質問があり、展示を見た人が書き込めるようになっていた。そこには「元通りの生活が帰ってくること」「前のような活気が帰ってくること」などが書いてあった。その時の私は大きな災害があった後にすべてが元通りになることは現実的ではないな。とっていて、となると復興する際に目指すべきなのは前のような活気という部分なのではないか、と考えていた。この講座を取っている人もだいたいそんな考えをもっているような気がした。

考えが変わった最初のきっかけは石巻スタディツアーだった。いろいろな話を聞いていると、防潮堤に批判的な意見を持っている人が多くいた。防潮堤は津波から人々や建物を守るために作っているとされているが、東日本大震災の津波にて大きな被害が出た地域には人が住むことができなくなっていて、防潮堤が何のために存在するのかが分からなくなっている。という意見を複数人から聞いた。この時に国側は一つの「復興」として防潮堤を作っているけれど、これは必要な物だろうか。と感じた。また住んでいる人たちが防潮堤をつくることに反対していたり、対話を求めているのに対して、応じずに防潮堤を作り続けていることに、私の考えていた「復興」の形はこれではないなと感じた。この時には私の思う「復興」はもともと住んでいた人達がもしくは、もともと住んでいた人と国や政府側が対話を重ねて作り上げるものなんじゃないかと思った。

次に考えが変わったのは水俣病について授業で教わった時だった。水俣湾埋立地について教わったときにもっといい方法があったのではないかと、思った。また、いまだに水俣病の認定患者問題などがあり、これは本当に最善だと思って行っているのだろうか。と不思議に思った。

そして福島スタディツアーにて自分の中の復興が固まったと思う。福島の東日本大震災・原子力災害伝承館の展示の中に「福島イノベーションコースト構想」というものがあり、端的に言えばロボットやAIなどの最先端技術の実証拠点を作って地域の活性化を目指しますというものだ。最初に私が思っていた「復興」の形は前のような活気を取り戻すというものだったから、この構想だったら昔思っていた「復興」が福島では、行われているということになる。が、これは本当に福島の人々が描いていた「復興」の形なのだろうか。私は福島に住んでいるわけでも、住んでいたわけでもない完全な部外者であるが、この構想にはもともと福島に住んでいた人たちの気持ちが反映されていないのではないかと感じた。ただ、この構想に賛成している福島に住んでいる人だっているだろうし、国側だって一応善意で行っていることだろう。これは「復興」の一つであるということはあるが、私の考えているより良い「復興」とは違うものだなと感じた。そして宝鏡寺での早川さん

が言っていた言葉の「復興とは町が元通りになることだから達成されることはない」という言葉を聞いてなるほど、と感じた。

私は「復興」の事を勘違いしていたのだ。ずっと大きな被害が出るようなことがあった場合に、被害者や国が目指さなければいけないものだと思っていた。今まで通りの生活に戻すことや、街を活気づけることを目指している状態の事を指していると思っていたが、それも一つの解釈なだけで人によって「復興」なんて変わる。その中でより多くの人が納得するより良い「復興」を模索しながら進めて行くのがこれから求められていることなのではないかと考える。

では私は今後どうやって関わっていったらいいのだろうか。いろいろな人から話を聞いて、感じて、考えて。人に繋いでいけないといけない責任を今私は持っている。この責任をどうやって果たすのがいいだろうか。自分の中に知識を蓄えてから今後増え続ける東日本大震災を経験していない世代に伝える？もう少し現地に近づいてみる？それとも責任を放棄して傍観者に回る？いろいろな選択肢があって悩んでしまうが、今のところは責任を放棄するのだけは避けたいなと思っている。たった一年間少しの時間学んだだけの人間が結論を出すのはまだ早い。今後も考え続けていこうと思う。

G：東北と復興の講座を1年間受講して、私は「過去」の出来事を「今」として捉えるようになったと思う。受講する前は、震災が起こった2011年のことにしか関心がなく、その後の状況を知ろうとしたり、自分なりの考えを持とうとしたことはなかった。振り返ってみると、自分はどこか傍観者のような立場だったのかもしれない。それは、知っている、知ることだけにしか目を向けずに向き合うということが自分は出来ていなかったんだと思った。スタディツアー以外でもみんなと意見を共有する場があって、それぞれ違う意見があってひとつの問題に対して良い意見もあれば批判的な意見があったりするけどそれに正解はなくて、正直議論することで自分の意見を伝えることが得意ではなかったけど1年間を通して議論をして自分の意見を持つことの大切さに気づくことが出来たのは大きな成長だと思った。

さらに、この講座を通して、震災や復興だけでなく、東北の文化や暮らしについても深く知ることができた。私は、それまで東北に対して「震災があった場所」というイメージしか持っていなかった。でも、学ぶうちに、東北には豊かな自然や伝統、地域ごとの特色ある暮らしがあり、人々がそれを大切に守り続けていることを知った。たとえば、東北には古くから伝わる祭りや郷土芸能があり、それらは震災を乗り越えた今も受け継がれている。被災した地域の人々が、踊りや歌を通じて心をつなぎ、前を向いて生きている姿に触れると、「復興」というのはただ建物を再建することだけではなく、その土地の文化や人々の営みを守り、次の世代へつなげていくことなのだと感じた。

H：何を、何から書けばいいのか、わからない、いやむしろ学びはあったのか？

全体を振り返り、去年と比較し、でも予想通り今年は去年度学んだことのステップの上で、いわば進化した学びを得られたような気がする。知っていそうで知らなかった道の分野に足を踏み入れ、知って、感じて、考えて、伝えて、伝承的行動は無認識にせよできていた、がしかし変わったのはそこじゃなくて、全体的に素直じゃ無いけど純粹だったのかもしれない。(疑う力は目一杯あった)それが、2023年度から2024年度の東北と復興を通して、徐々に一つ一つに意味を見出して考えるようになったのかもしれない。おそらく去年度の最後のレポートで特筆されていたことは「きくことの大切さ」だった。「復興」に疑問を呈したのも里見さんの話を聞いて。まずは「知る」ところからの一年だった。それらを振り返ると、やはり今年度は次の段階に行っていると実感する。

ということで、2024年度はどんな学びを得たのだろう。絞りに絞ってまとめるとするならば、大きく「3.11に直接関わる学び」、「3.11から派生した、人とか社会に関する学び(授業内で出てきた話題と、自分)」があ

る。つまり東北と復興は内田の言っていた通り東日本大震災というカテゴリーを超えて学びを与えてきていたと思う。

まず、前者については立ち直りの段階の被災地、被災者が主題(?)みたいになっている東北と復興だからこそやはり「復興」を中心に3.11について考えたり、学んだりがあった。具体的には石巻と浜通りの被害の違いと復興の違いだとか、被災地と脱殖民化、伝承的行動の4段階などだ、細かい内容はその都度レポートにまとめているので割愛する。前述した通り、去年、東北と復興人生以前と比べ考える力、考えようとする解する力は幾分か向上して基礎→発展の発展を今年度はできたようにも思えるしかし、0点はあれど100点は無い界限なので確信に近づいたと言うより、霧の向こうに新しい城があったと言うようなイメージ。それでも、学んだ「プラス」があるからこそ伝えるでも何でも(現状、伝えるのが精一杯)、生かすことはできると思う。

続いて、後者の「3.11から派生した、人とか社会とかに関する学び」について、前に書いた震災から生まれる社会問題に加え、それに関わっていく“第三者”(当事者に近い場合もあるかも?)“支援者”ひいては“ポジション”とか、さらには自分自身と東北と復興の間で生まれるものとかそう言ったことに対する教養や、疑問が得られたように思う。

I：私が今、「東北」と「復興」について思うことの中には、学ぶ前と変わった部分と変わっていない部分がある。

まず「東北」について。

私は講座で学び始める前、「東北」という言葉に「美味しい食べ物がたくさんある」とか「昔から伝わる文化が豊か」といったイメージを持っていた。その時そう思ったのは、今まで日本のことを学ぶ中で知識として知っていたり、実際に自分が東北に足を運んだ際に素敵な体験を沢山したからだと思う。とても素敵な場所であり魅力溢れる場所というその時の「東北」のイメージは今も変わらない部分だ。しかし、学んでいく中で私が「東北」について思うことの中に加わったのは「被災地」という観点だ。学び始める前の私は東日本大震災当時東北で何が起こったのかをほとんど知らなかったし、その事について考えることもなかった。しかし、「環境学」講座で福島第一原発事故について学んで、東日本大震災について知る機会ができて、高校3年生で「東北と復興」講座に出会った。知りたいという気持ちを持って今まで学んできたことはとても苦しくて、衝撃的な事だった。知ることの多さや、難しさに考えることから逃げ出してしまう時もあった。でもいつも、学び続けなければいけないと思った。なぜなら、実際にあるのに自分に見えていない観点を見つけなければいけないと思ったからだ。…(中略)…

今まで自分が持つことのなかった「被災地」という観点。その観点を私は「東北と復興」講座に出会ったことで持つことになった。そして、石巻市スタディツアーや、福島県浜通りスタディツアーに行き、それぞれの場所で感じることは違った。それぞれの場所にフォーカスすることでしか得ることができない学びがある、知ることができない歴史があると思った。今回、原発事故から東日本大震災のことを考えたように、一つの物事に対して一面的に見るのではなくて、他の物事との繋がりを捉えられるようになれば、更に新たな観点を見つけていけるのではないかなと思う。

次に、「復興」について。

講座の中でずっと考え続けていたことだったが、一年の学びを終えて考える私なりの「復興」は、その言葉の意味に正解はなく、それぞれの思う形があるものだなと思った。それでいいのだと思う。しかし、自分の復興の形が正義だと決めつけて進んでいくことが、ある人にとっては良くないものである可能性があることを国の政策や、ツアーで行く先々で聞いた、政策への不満の声から実感した。

双葉屋旅館の女将さんがおっしゃっていた、議論することが大事という言葉が印象に残っている。そもそも復興という言葉の意味の捉え方が違うのだから、その言葉の使い方も違うし、言葉って本当に難しいものだと

思うけど、いくらぶつかっても私たちは言葉を使って話していくことしかできないし、だからこそ議論することから逃げてはいけないと思った。

「東北と復興」講座を受講して、学ぶことができて本当に良かったと思っている。東日本大震災について関心を持って、沢山のことを知れたことはこれから生きる上で大切なことであり、また、知ったことはこれからの世界をつくる上での責任を負ったことでもある。一年間で学び終えた訳では決してなく、この問題はこれから先ずっと考えていかなければいけないと思う。講座の中で何度も苦しくなって、でも実際に経験した訳ではない自分が苦しいと思うことに申し訳なさみたいなのを感じたりして、すごく悩みながら取り組んだので、これからも自分の心をダメにしまわれない程度に、大切にしながら考え続けていきたいと思う。

J: 3年間学んできたのですが全然足りないと感じます。3年間じゃ学びが足りないと感じた。まだ学びたいという気持ちが強いです。けどもうこの講座で学べないのが非常に悲しいです。けどこの講座で自分が知らなかった事を知れたり新たに知れたことも沢山ありました。3年間大変でしたが良い学びになりました。

3. 生徒の言葉から見える学びの 2023 年度までの学びとの変容

前年度までの学びとの違いにつながる一番大きな理由は、やはり福島県浜通りスタディツアーを実施したことだと思う。これまでもスタディツアーを実施しないまでも、関東にしながら福島第一原発事故について学ぶということを継続してきていた。しかしスタディツアーを実施するにあたって、ツアーでの学びが生徒に加わっただけではなく、授業者としてはツアーを前提とした事前学習や事後学習学びを行う必要があり、結果的に授業の内容も 2023 年度までと比べて、同じ福島第一原発事故を取り扱っていても視点や内容が異なっていた。この辺りは前回のマガジンの中で詳述しているので、割愛する。しかし一番重要視したことは立場性（ポジションナリティ）である。東北と関東、東京電力の電気を使っていた/使っている関東の〈わたし〉たち、あるいは戦後復興の中で作られた原子力発電所、その結果としての「豊かさ」を享受している〈わたし〉たち。こうした文脈の中で自らの立ち位置が位置づけられることで、子どもたちは学びの苦しさや責任を感じていたように思う。こうした学びの苦しさから目を背けたり、責任を放棄したりすることなく、最後まで学び、考え続けた結果、子どもたちはどのような学びを得たのであろうか。ここではフロムの「聴くということ」に対する考え方からみていく。

まず多くの子どもたちの感想の最後は、「(分かったこともあるけれど) 分からなかった」ということを前提に、それで学び続けよう、考え続けようとする姿勢で締めくくられている。それはこの講座を通して学んだ、知ったことによって「分からなくなった」ことに対する、だからこそこれからも「知りたい」という姿勢と、学んだ、知ったことを引き受けた結果自らに生じた「責任」を放棄したくないという姿勢から来ているように思う。前者のさらに「知りたい」という姿勢については、フロムのいう本来的な interest=人間への関心¹に基づくものだといえるのではないだろうか。堀江宗正によれば、フロムは「「関心 interest」という言葉は、本来はラテン語で「間に存在すること inter-esse」を意味していた」ため、「人と人との間に存在するがゆえに、人は他の人に関心を抱くのである」と考えていたという。さらにこうした本来の（原義としての）「interest」の意味に近い日本語の言葉は「関心」で「能動的に関わろうとする心構え」であり、逆に現代的な「interest」用法に近いものが「興味」で「感覚を通して受動的に心をかき立てられ、引きつけられる様」だそうだ。²ここで面白いのは、E さん（当時、高校2年生）の言葉にある「受け身の「知る」という行為には、本質というか、本音は見出せないと思う。（この受け身の「知る」とは、自分ごととして考えていないや、この出来事がそこだ

¹ エーリヒ・フロム著、堀江宗正・松宮克昌訳『聴くということ 精神分析に関する最後のセミナー講義録』2024 年、第三文明社、p275-p276

² 前掲書、p325-p326

けの時間軸で完結していると思っている人のことだ。) 自分から「知る」意欲があることを示して、それでやっとスタートラインに立てると思う。」という言葉が、この「興味」と「関心」の意味を説明しているところだ。「本質というか、本音を見出すために能動的に「知る」ことが重要だと言っているが、これは「関心」に他ならない。そしてそれは原義としての「interest」に近い。

一方で後者の学んだ、知ったことを引き受ける、応答(=response)としての「責任(=responsibility)」については、フロムの「聴く」という概念につながっているように思われる。堀江によれば「フロムの精神分析は、可視化されない内面的本質を聴き当てようとする。それは「見ていることと違うものの可能性に開かれる」ということ」であり、さらに「見る」という言葉でも「主体的に見る」・「主体を通して見る」という意味での「見る」こと、見方は肯定しており、それは「人としての感情を伴いながら接することを通して、自分には操作できない他者の最奥の根源、「その人の本質を丸ごと、あるがままに見る」こと」だそうだ。この考え方についてはDさん(当時、高校2年生)の言葉がかなり象徴的である。

石巻の閑散とした風景を眺めた時、震災前の情景をイメージし感傷的になるが、それは3.11が自分と切り離せる存在ではなかったからだろうか。例えば200年後の人間が石巻に対して同じように感傷的になるのだろうか。人間の歴史を俯瞰した時私が今いるこの場所も何らかの復興を経て成り立っていてこの土地に思いを馳せた人がいたのだろうが、その人は今この土地を見て復興を果たしたと思えるのだろうか。この講座を取る前のニュースで阪神淡路大震災は復興完了という記事を見て当時の私も国からのその言葉通り復興は終わったんだと受け取ってしまったが、今考えるとそれはインフラや都市などの可視化できる復旧を指していて失われてしまったコミュニティや暮らしが元通りになったわけではないのだろう。復興というのは極めて多面的であり一つの視点で捉えられるものではない、文化や精神的なものも絡み合いどこかで対立してしまうことも免れない。そう考えた時、復興というものに終わらないあるいは復興が終わったと誰が決められない。復興の基準は人によって異なり満場一致での復興を実現するのはほぼ不可能に近いのかもしれない。

私は復興に対してもちろん人の希望になることだと思うが同時に残酷な側面も存在していると感じるようになった。福島は誰かの犠牲の上で復興が成り立っていると強く感じ、表面上では行政にとっての復興を意味する事業が進められていてそういった事業は無関係な人からしても明らかな復興であるが、上書きされてしまった人達が自分たちの存在を認知させることはとても難しい事を理解した。これは加害構造が明確化されているが被災者の間でも復興観の対立は避けられない。可視化されなかった思いを抱えている人が私の認知が届かない範囲にも大勢いると考えると「語り」が記録以上の意味を持つ事が分かる。

スタディツアーに行く前に「阪神淡路大震災は復興完了という記事を見て」、Dさんは「復興は終わったんだ」と受け取っていたが、実はそれは「可視化できる復旧を指して」いたのではないかと考えている。さらに「石巻の閑散とした風景を眺めた時」、「震災前の情景をイメージし感傷的」になりながら、「3.11が自分と切り離せる存在ではなかった」ということに思い至っている。さらに「表面上では行政にとっての復興を意味する事業」と、表面的に見えていることと、「誰かの犠牲の上で復興が成り立っている」というそれ以外の可能性について言及をしている。そのうえで、「上書きされてしまった人達が自分たちの存在を認知させることはとても難しい」としつつ、「可視化されなかった思いを抱えている人が私の認知が届かない範囲にも大勢いる」とその可能性を思考し、だからこそ「語り」が記録以上の意味を持つ」と結論付けている。この場合、Dさんが想定しているのは「上書きされてしまった人達」やその周りの人たちの「語り」であり、Dさん自身はこの「記録以上の意味を持つ」「語り」を「聴く」側にいるのではないだろうか。そしてその「語り」を「聴く」ことが、その「語り」を引き受ける(応答としての責任)とつながっているのではないだろうか。

このスタディツアーの中で「見る」という行為については、過去の生徒たちの感想の中でもしばしば出てくる言葉である。

「だから、実際に行ったときに受けた衝撃がすごく大きく残っています。こんなに海や川や山が近くて、何もなく、あたたかくて、綺麗で、ここでたくさんの人が亡くなっていて、当時のことは分からないし、今の ことしか見ることはできないけど、それでもたくさんのなにかが私の中にあって、それを言葉にすることはとても難しいです。」(2022 年度文集より、当時高校 1 年生)

「ずっと心に残っていることは、今も現地に住んでいる方に、「私は震災遺構(門脇小学校)をみたくない」と言われた事だ。現地に住んでいる人はほぼ毎日見るだろうし、それを見て辛いと思うなら「撤去すべきなのかな」という気持ちもある。しかし、私は震災遺構がないと「本当に被害があったの?」と思ってしまうだろう。写真だけでも理解できるが、実物が無いと実感が湧かない。震災遺構を残したい人と残したくない人、現地の方も色々な意見があるだろう。この問題は「復興」を考える上で重大であると思った。大川小学校は在学していた生徒が残して欲しいという事で震災遺構になった。この場合、住民の反対はあったのだろうか。反対派は言いつらいだろうなと思う。この疑問が私の中でずっと残っている。」(2022 年度文集より、当時高校 2 年生。震災遺構を「見る」ことの「私」にとっての意味と「現地に住んでいる人」にとっての意味の違いの気付き。ただし心に残っていることは「現地に住んでいる方」の「私は震災遺構(門脇小学校)をみたくない」という語り)

「東日本大震災を振り返ってみると本当に衝撃があったなと深く思い、実際に自分の目で見ることで込み上げてくるものがありました。まだ被災の現状を知らない誰に自分の目で見て確かめたことを伝えていく事の大切さを知って、今自分が出来る事として学んだことを伝えたいです。」(2022 年度文集より、当時高校 1 年生)

「私たちが訪れた石巻市は、震災から 12 年が経過し、すごく綺麗な街になっていました。「復興」と聞き、イメージするのは、瓦礫がなくなり、建物ができ、人々が日常を送れるようになることだと思います。しかし、石巻市の街並みは、震災があったことを感じさせない、石巻市に歴史があることも感じることが難しいものでした。綺麗で同じ建物が立ち並び、静かな街を目の前にし、とてつもない喪失感を感じました。」(2023 年度文集より、当時高校 3 年生)

「では一年間、「復興」とは何なのか問い続けてきてどうだったのか書いていこうと思う。まず最初に答えを見つけることはできたのか。単刀直入に言ってしまうと答えは「N0」だ。」(2023 年度文集より、当時高校 3 年生。答えを「見つける」という風景を「見る」ものとは少し違う「見る」という表現。)

「あまり比較をするべきではないと思いながらも現実を見れば社会的弱者は確実に存在していて、社会的に見てマジョリティの側にいる人に比べると、社会的弱者はより支援を必要とするのである。能登半島地震の中継を見ていたとき、数分だけ障害者用の避難所が映し出された。そのときは気付けなかったが、後からじわじわと障害者が映し出される時間だけが少なかったことに気が付き始めた。私にはその光景から何かを隠されているように感じた。社会的弱者が苦しんでいることをもっと社会に伝えてもいいのではないかと思うようになった。この違和感を機に災害福祉に興味を持つようになった。東北と復興を受講していなくても気付けたことなのではないか、と思われるかもしれないけれど、一年の学びがここまで導いてくれたのだと思う。」(2023 年度文集より、当時高校 3 年生。ツアーでの光景ではないが、現実を「見る」、中継を「見る」という行為)

これまでの感想を改めて「見る」、「聴く」という視点から読み直していると、ニュース等を「見る」という行為とスタディツアーで景色を「見る」という行為、そして社会情勢(現実)を「見る」という大きく 3 つの「見る」があった。しかしスタディツアーで景色を「見る」という行為では、見た通りの景色をそのまま受け取るのではなく、事前学習や実際に現地の方から聴いたお話によって、その景色の意味すること、さらにその奥の「本質」を見ようとしているように感じた。一方でそれは見た景色をそのままに「見る」ことではなく、感情的に「主体的に」「見る」という行為でもある。その結果「見る」行為によって、「知ったこと」というよりも「感じたこと」「考えること」として受け止めているようである。

逆に「知ったこと」として出てくる行為が「聴くこと」であることが多かった印象である。今回は「見る」に着目したので割愛するが、現地の方（被災された方、支援されている方、遺族の方等、当事者の方たち）から「聴く」言葉をもとにして、何かを「知った」という受け止めが多い。だからこそ「知った責任」というような言葉も出てくる。「知った責任」≡「聴いた責任」であり、それは関東から訪れた「わたしたち」に「現地の方」が「わざわざ」「話してくれたこと（＝語り）」だからこそ、それを次は家族や友人などに「伝える」行為によって責任を果たそうとする。あるいは考え続ける、関心を寄せ続けることで責任を果たそうとする。前者の「伝える」行為については、伝承やみんなで考えることがキーワードになっているだろう。そして後者の考え続ける、関心を寄せ続けることは、さらに新たな「語り」を「聴く」という行為（講座の受講を数年に渡って続けたり、関心を寄せて自ら現地を訪れたり、当事者の方たちと出会ったりすることによって）につながる。これは「能動的な受動性であり、受動性と能動性の総合である」「生命あるものとして生き生きと反応し返すような受動性」「十分な覚醒（自分の心身に生じるわずかな変化にも注意を払い、自らの変化の可能性に開かれた状態に置く行動に覚醒した状態）の結果としての鋭敏な受動性」³である。

しかし、この授業においてこうしたフロムの姿勢や精神分析について扱ってはこなかった。ましてや何かの正解やゴールを設定し、そのためにテストやレポートを作成させて評価することはしていない。この講座において重視していること、生徒たちに求めている姿勢は、小さな物語に耳を傾けるということであり、様々な声に対する応答責任を果たそうとするということであり、もって「東北」と「復興」を考えることであった。だからこそ報告会やシンポジウムへの参加、文集にまとめる等、誰かに「伝える」、誰かと「話し合う（対話する）」こともツアー後の事後学習の中で重視している。それがこの講座の目的でもあるし、1年間の学びの中でたびたび口にして伝えている。だからこそ「責任」という言葉が子どもたちの感想の中からも多く、繰り返し出てきているのだろう。しかし結果的にこうした小さな物語、さまざまな声を重視する姿勢が、フロムの定義づけるような「聴く」という行為につながっているのかもしれない。自らが知っていると思っていたこと、新聞やテレビなどで見ていた情報が、「語り」や「声」を「聴く」という行為によって新たな気づきを得たり、違った意味解釈をするようになったりとする中で、ますます「分からな」くなる。そして、だからこそ主体的にさらなる「聴く」という行為につながり、考え続けるという姿勢につながっているのではないだろうか。もちろん同時に「聴く」という行為によって引き受けた「語り」や「声」を「証言」や「代弁」として別の誰かに自らが「伝承する」という能動的なかわりによる応答責任を果たすことも求められる。⁴ただしそれは医者やカウンセラーのような精神分析を行う者としてではなく、一人の人間、引き受けた「語り」や「声」に対する「証人」として存在することである。

2024年度の石巻市スタディツアー報告会の後半で、記念講演をお願いした立命館大学院人間科学研究科の村本邦子教授は「不公平で抑圧・搾取に満ちた復興を許さない眼で見続けること。できることは、「被災と復興の証人になること」に尽きるのかもしれない。距離があるから見えないこともあれば、距離があるからこそ見えることもある。時間が経っても忘れ去ることなく、関心を持ち続け、被災地の人々が、それぞれなりの復興の物語を創っていく過程を歴史の証人として見守ることができたら、遠くにいる私たちも私たちなりの復興の物語を創っていけそうな気がする。」⁵と書いている。ここでの「証人=witness」は「見る」ことに主眼を置いている。しかしそれは、「関心を持ち続け、被災地の人々が、それぞれなりの復興の物語を創っていく過程を歴史

³ 前掲書,p349,p357

⁴ 授業においては自らの立ち位置や聴いた話に対する「証言」や「代弁」について、次の本の一部の言葉を抜粋して紹介した。宮地尚子の『環状島＝トラウマの地政学』みすず書房 2024年/信田さよ子 上間陽子『言葉を失ったあとで』筑摩書房 2022年/岡真理『記憶/物語』岩波書店 2000年/ジュディス・L・ハーマン著 中井久夫・阿部大樹訳 小西聖子解説『心的外傷と回復 増補版』みすず書房 2023年

⁵ 村本邦子『周辺からの記憶 三・一一の証人となった十年』,2021年,国書刊行会

の証人として見守ることができたら、遠くにいる私たちも私たちなりの復興の物語を創っていけそうな気がする。」とあるようにフロムの言うところの「主体的に見る」という意味に近いように思う。しかし「見る」という行為だけではなく、「聴く」という行為によって成立する、「聴いた話」を誰かに語る「伝承者」「証言者」「代弁者」としての「証人」という姿勢も存在するのではないだろうか。

だからこそBさん（2024年度当時、高校1年生）は学んだ結果の自らの立ち位置や姿勢について次のように思いを吐露し、考えている。

「ここまで「東北」と「復興」に対しての考えを述べる中で、ずっと悩むのが自分の立ち位置である。つまりは自分のポジショナリティ。もちろん被災当事者ではないので自分事には中々なれないが、決して他人事ではない。自分には厳然と加害性があるわけで、いわば加害当事者という当事者の一種なのかもしれない。加害責任があるから決して他人事ではないのだ。自分の「東北の復興」をまとめると、それは加害当事者の「ごまかし」（理解した気になってしまっている、惨事便乗型資本主義）と被害当事者の「あきらめ」（帰りがかったふるさとがない、震災トラウマ復興ストレス、分断・対立）。

じゃあ自分はどこにいればいい。宮地尚子の「環状島＝トラウマの地政学」に出てくる環状島の論理を自分に当てはめて立ち位置を考えてみた。非当事者の自分たちは、支援者と傍観者の二択に分かれているらしい。どちらも腑に落ちない。支援者と思える行動や考えをしているわけでもないし、傍観者と思えるほど無知・無関心ではない。自分の立ち位置を模索している中、腑に落ちる表現があった。それは立命館大学の村本教授の「証人」という言葉だ。環状島のどこにいるのかはまだ分からないが、今は証人という言葉に納得している。これで悩んでいた、自分の行動や考えも少し明確になった。証人になるということ、それは被災当事者の証言や背景を理解していくプロセスであり、代弁（もちろん理解はしきれない前提）するという事であると考え

4. おわりに

以上、フロムの「聴くということ」に焦点を当てて、今回は子どもたちの感想を読んできた。実際のところ、教員である私が精神分析やカウンセリングの専門的技法や技能は全く習得していないし、ましてやそれを誰かに教えることは当然、全然できない。そのため前提としてフロムの「聴くということ」の概念を持ち出したことが、かなり唐突で妥当性にも欠けているようにも思う。しかし人と世界との間の「中間点」ととどまり続けることによって人は成長するという教育学的な概念は、近年教育学者のガート・ビースタによって言われていることでもある。ここに相似があるかもしれない。

一方で例年、最後の感想文の課題は3分の2前後しか提出されない。これは残りの3分の1程度の生徒は感想文を書けなかったということだ。もちろん忙しさなどの様々な理由に起因するだろうが、引き受けて考えて文章でまとめることの難しさ、苦しさがある状況を引き起こしているともいえるかもしれない。実際に紹介した生徒たちの感想も、それぞれの個々がもともと持っている力やほかの授業での学びなども総合された結果かもしれない。

しかし、高校3年間「東北と復興」を受講したある生徒は最後の報告会で、3年間の学びを通して、最後まで「分からないこと」「気付かなかったこと」、逆に最後に「気付いてしまったこと」「生まれてきた問い」もあると語った後に、「自分は将来は義肢装具士になろうと思っている。この仕事が直接に「東北と復興」と結びつくことはないかもしれないけれど、でもいつか災害で被害を受けた人に自分が義肢装具を作ることがあるかもしれない。だからこそこれからも「東北と復興」のことは考え続けたい」と語った。その生徒のこれからの生き方と「東北と復興」での学びや関心が密接にかかわっていること（変化や影響をもたらしていることも含めて）、そしてその生徒の人生の中でこれからも確に残ることを、同じ社会を生きていく市民の一人としてうれしく思った。